

大学生の高齢者に対するイメージの研究

大坪 真子

(山 愛美ゼミ)

はじめに

高齢者とは、WHOによると65歳以上の人のことで、特に75歳以上は後期高齢者と表現される。2022年の平均余命は男性が81.05歳、女性が87.09歳である（厚生労働省、2023）ことから、平均して15～20年は高齢者として過ごすことになる。近年、日本の総人口が減少する中で2022年時点の高齢者人口は3624万人となり、高齢化率は昭和25年には5%以下だったが平成6年には14%、その後も上昇を続け2022年には29%となった（内閣府、2023a）。先進諸国と比較しても日本は最も高い水準にある。

また、65歳以上の者のいる世帯は、2021年時点で全世帯の49.7%を占める（内閣府、2023b）。しかし、三世帯世帯は、2000年には26.5%であったが2021年には9.3%と減少し、一人暮らしの高齢者は、2000年の女性17.9%、男性8.0%から2020年には女性22.1%、男性15.0%まで増加している。こうした核家族化や構成員数の減少は、二度のベビーブームという特殊な時期での新しい世帯の形成、その大部分が戦後日本の経済発展に伴う事情により核家族形態をとったことが背景として考えられる（平野、2009）。これらから高齢者人口や割合は増加しているものの、高齢者が孫世代の人と生活をする機会は減少しており、孫世代が高齢者と関わるのは家庭以外の環境である場合が多いと考えられる。

死の受容過程を提唱したKübler-Rossは心理学者河合隼雄との対談で、子どもたちは全体的に老人から無条件の愛を知ることができたと述べ、最期を自宅で家族と過ごす選択をすることで、子どもたちは年を取ることや死ぬことの意味を何世代にも渡って受け取ることができるとしている（河合、1991）。三世帯世帯が減少し、それまで高齢者が担っていた家庭での役割は徐々に薄れている

と考えられる。死別やその過程を体験する機会の減少は、後の死生観や老いに対するイメージなどの心理的側面にも影響する可能性がある。

高齢者と同居していない孫世代の学生が高齢者について知ったり、接したりする機会は、祖父母宅への帰省以外にテレビやインターネット等のメディアで流れる情報や、近所の人、アルバイトの際が挙げられる。メディアで発信される高齢者の話題は、踏み間違いや逆走といった自動車事故や迷惑運転などのショッキングな内容であることも多い。75歳以上の高齢運転者による死亡事故で最も多いのは、踏み間違いも含めた操作不適による事故（警察庁、2023）で、75歳未満に比べて割合が高いため高齢運転者の特徴といえる。

アルバイトでの関わりについても、筆者の周囲には「高齢者は話を聞いてくれない」、「高齢者に感情的にクレームを入れられた」などの体験を語る者が複数人いる。河合（1994b）は「老いと言えば『ほけ』を連想する、というのが最近の傾向ではなかろうか」とし、「壮年の時は八面六臂の大活躍をした人が、老いてくるに従ってまったく無力となり、さらに老い故の多くの混乱状態を示すようになる事実は、われわれの周囲にもすぐ見出すことができるのである」と述べている。

こうした高齢者の状況に対して、世間では「老害」という言葉が特に目立つようになった。現代における老害とは「害のある老人」や「老いによる弊害」という意味を指しており、「害」という表現からは強い拒絶や嫌悪が感じられる。その一方で、アニメーションにおける高齢者キャラクターは、老害とは真逆の良い役割を与えられていることも多く、Jungの提唱した元型の1つである「老賢者」を思わせるような特徴がある。元型について河合（1994a）は、「人間の普遍的無意識の内容の表現のなかに、共通した基本的な型を見出すことができると考え、ユングは、それを元型

と呼んだ」と説明している。Jung (1999) は老賢者について、「子どもにどの道が目標に通じているかを知っていて、それを主人公に教えるのである」と述べている。

日本の有名なアニメーション作品『アルプスの少女ハイジ』（高橋, 1979）の中では、主人公の少女ハイジとその祖父であるアルムおんじとの交流が描かれている。アルムおんじは無口で人付き合いを好まず不愛想にも見えるが、両親を亡くしたハイジに衣食住の提供や愛情をもった交流を行い、ハイジや友人のクララは成長していくのである。スタジオジブリのアニメーション映画『風の谷のナウシカ』（宮崎, 1984）に登場する大ババ様は、目が見えず普段の生活は子どもたちに支えられている一方で、古くからの歴史や言い伝えを知っており時には忠告をする“長老”的存在である。他にも高齢者キャラクターが登場する作品は多く存在し、幼い子どもや悩める青年に対して静かに寄り添い、背中語り、ピンチの時には助言をするのである。

問題と目的

高齢者を表現する言葉の1つである「老害」と、アニメーションにおける高齢者キャラクターのイメージには大きな差がある。三世代世帯が減少し、Kubler-Ross の述べていた、祖父母にしかできない役割や無条件の愛を受ける機会が薄れているなかで、大学生たちは高齢者に対してどのようなイメージを持っているのか明らかではない。また、孫世代が高齢者と関わるのは家庭以外の環境である場合が多い現代において、祖父母との同居経験やその期間、同居の状況によって高齢者イメージがどのように異なるのかを検討したい。

先行研究では、高齢者イメージの形成に祖父母との同居や会話は重要であり、祖父母以外の高齢者についても、話す機会が多いと肯定的なイメージに傾ける可能性があるという報告（大谷・松木, 1995）がある。また、自身の祖父母を、高齢者イメージの基にしている大学生が多く、一部の学生は地域の高齢者や、メディア等の高齢者から高齢者イメージが形成されていることも明らかとなっている（小嶋・孫, 2022）。しかし、高齢者イメ

ジに関する先行研究には、高齢者を認知症高齢者のみに限定するものや、調査協力者を看護や介護を専門とする学生に限定したものが多く（石津・石川・江口, 2021, 桂・佐藤, 2007）。イメージの測定にSD法やリッカート法の質問紙を用いる研究も多い（森本・橋本, 2021）が、大学生が普段から感じているありのままの高齢者イメージを明らかにするために、質問項目の表現に縛られない、自由な回答が可能な方法を用いたい。

そこで本研究では、大学生が持つ高齢者に対するイメージを明らかにすることを目的とし、「高齢者は」から始まる20答法を用いた高齢者イメージの分析を行う。この方法は自由回答法で、被験者は自分自身の言葉で自由に表現することができる。そのため、研究者の視点に制約されない自発的な反応を得ることが可能（岩熊・横田, 1991）となる。また、高齢者との関わり頻度や同居の有無、期間、興味関心の有無を外変数として高齢者イメージへの影響を検討する。

方法

調査協力者・調査時期 大学生78人（女性41名、男性35名、未回答2名；平均年齢18.75歳 $SD=0.77$ ）に対して2023年10月及び11月に調査を実施した。

質問紙構成 質問紙はフェイスシート（氏名、性別、年齢）、高齢者イメージ測定のための「高齢者は」から始まる20答法、高齢者との関わりについての質問によって構成された。

1. 高齢者イメージ測定のための20答法

Kuhn & McPartland (1954) によって開発された20答法を援用した。教示については山田 (1989) の行った、調査協力者に理解しやすいよう工夫されたものを、高齢者イメージ測定のため一部変更して実施した。具体的な教示は、「高齢者ということ、あなたの頭に思い浮かんで来たことを、高齢者は…に続けるようにして、20項目以内で書いてください。どういうことを書いたらよいか、いけないとかいうことはありませんので、思いつくままに自由に書いてください。」とした。

2. 高齢者との関わりについての質問

石津・石川・江口（2021）の先行研究をもとに、質問を作成した。①高齢者との関り経験の有無と頻度（毎日、週に1～2回、月に1～2回、年に1～2回、ない）、②高齢者との同居経験（ある、ない）、③同居の状況（現在同居している、過去に同居していた）、④同居期間（10年以上、5年以上10年未満、1年以上5年未満、6ヶ月以上1年未満、6ヶ月未満）、⑤高齢者に対する関心の有無（ある、どちらかといえばある、どちらでもない、どちらかといえばない、ない）

手続き 大学の講義時間の一部を利用して質問紙を配布・回収を行った。倫理的配慮として回答は任意であること、調査の目的や個人情報保護に配慮することをフェイスシートに確認事項として記し、配布時にプリーフィング、回収時にデプリーフィングを行った。

結果

1. 高齢者イメージ測定のための20 答法

平均記述数 1人あたりの20 答法の平均記述数は7.43個（ $SD=4.06$ ）であった。

分析と手続き 20 答法の分析は、フリーソフトウェアのKH Coder3Beta.03i（樋口, 2020）を使用し、テキストマイニングを行った。分析手続きは『動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング』（樋口・中村・周, 2023）にならって行った。

記述データは誤字脱字を訂正し、KHcoderで語の抽出を行った。総抽出語数は2972語であった。抽出した語のうち一般的に利用され、本研究の目的には影響しない語句である「～だと思ふ」の「思ふ」、「～な人が多い」の「人」「多い」を除外した。また、「自分中心」が複合語として検出されるよう強制抽出を行った。その結果、総抽出語数は2858語となった。田附（2015）や日原・杉村（2017）は5回以上出現のあった語で分析を行っているため、本研究でも5回以上出現のあった語を取り出して分析を行った。

共起ネットワーク 抽出語から高齢者イメージの共起ネットワーク図を作成した（図1）。語を囲んでいる円の大きさは出現頻度の高さを示し、円は強く結びついた部分ごとに色によってグループ分けされている。円同士を結ぶ直線が語同士の共起性、つまり結びつきの強さを表し、直線が太いほど結びつきが強いことを意味している。語同士

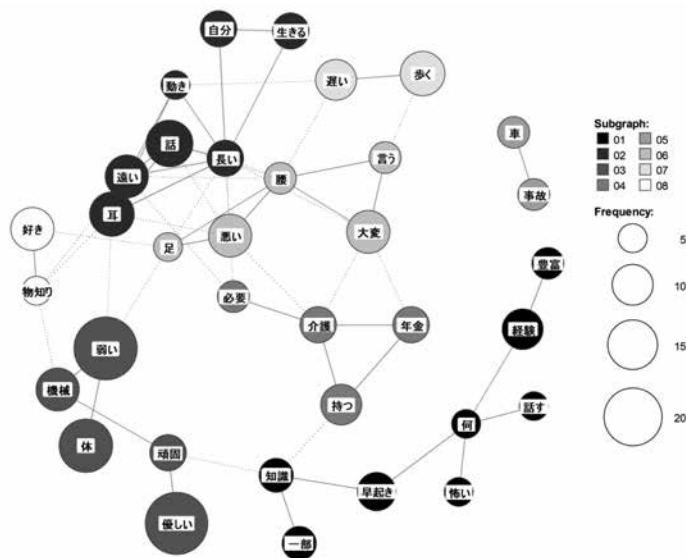


図1 高齢者イメージの共起ネットワーク図

大学生の高齢者に対するイメージの研究

の距離は特に意味を持っていない。共起ネットワーク図(図1)によると、身体的特徴を表すグループや社会的特徴を表すグループなど、8つのグループに分けられた。

出現頻度は「弱い」や「優しい」が最も高かった。「弱い」は「機械」、「体」と結びつきが強く、「スマホやPCなどの機械に弱い」、「体が弱い」という2つの文脈で出現した。「長い」は「生きる」、「話」と結びつきが強く、「長く生きている」「話が長い」という2つの文脈で出現した。身体的特徴を表す語として「足」「腰」が「悪い」、「耳」が「遠い」、「歩く」のが「遅い」といった具体的な体の部位やそれに伴う特徴が示され、それぞれ語の結びつきが強かった。社会的特徴を表す語として「年金」や「介護」、「持つ」の結びつきが強く、「持つ」はお金や知識など様々な文脈で使用された。また、「介護」は「必要」と結びつきが強く、「必要」は身体的特徴との結びつきがあることから、身体的特徴と社会的特徴に繋がりが示された。

「何」は「何を考えているかわからない」「何をするかわからない」という文脈での出現が複数あり、「怖い」と強い結びつきがみられた。「車」「事故」は結びつきが強く、これらは他の語とは結びつきが弱かった。「好き」には「高齢者は若者が好き」という肯定的な意味を持つものもあった。

2. 高齢者との関わりについての質問の割合

高齢者との関わりについての質問の回答の選択率を算出した(表1)。また、高齢者との同居経験がある人のみの内訳と選択率を算出した(表2)。

高齢者との交流頻度は「週に1~2」(29.5%)が最も多く、次に「月に1~2回」(21.8%)が多かった。高齢者との同居経験は「ない」(69.2%)が半数以上だった。同居経験の「ある」(30.8%)24人のうち、半数以上が「過去」(70.8%)の同居だった。同居経験のある人のうち、同居の期間は「10年以上(41.8%)」が最も多く、10年以下の項目はそれぞれ15%前後で並んだ。

表1 高齢者との関わりについて N=78

項目		n	%
1. 高齢者との交流頻度	毎日	13	16.7
	週に1~2	23	29.5
	月に1~2	17	21.8
	年に1~2	13	16.7
	ない	12	15.4
2. 高齢者との同居経験	ある	24	30.8
	ない	54	69.2
3. 同居の状況(ある人のみ)	現在	7	9.0
	過去	17	21.8
4. 同居の期間(ある人のみ)	10年以上	10	12.8
	5~10年	4	5.1
	1~5年	3	3.8
	6ヶ月~1年	4	5.1
	6ヶ月未満	3	3.8
5. 高齢者への興味	ある	10	12.8
	どちらかといえばある	17	21.8
	どちらでもない	27	34.6
	どちらかといえはない	13	16.7
	ない	11	14.1

表2 同居経験がある人の内訳 N=24

項目		n	%
3. 同居の状況	現在	7	29.2
	過去	17	70.8
4. 同居の期間	10年以上	10	41.7
	5~10年	4	16.7
	1~5年	3	12.5
	6ヶ月~1年	4	16.7
	6ヶ月未満	3	12.5

3. 高齢者イメージと関わりについての対応分析

20 答法の記述データと、高齢者との関わりについての質問の回答項目の間にどのような特徴や傾向があるのかを分析するため、質的データを分析する多変量解析法の1つである対応分析を用いた。共起ネットワークと同様に、20 答法の記述データから抽出された語で出現頻度が5以上の語を対象に分析を行った。

黒地に白文字で示されている項目は、高齢者との関わりについての質問の回答項目で、黒字の語は20 答法の抽出語である。図の原点付近には特徴のない語、つまりどの回答項目にも出現がみられた語が集まる。原点からみて回答項目の方向にある語や、原点から離れている語ほど特徴的、つまり特定の回答項目で多く出現した語であるといえる。また、回答項目の配置から、出現した語が似ているグループごとに分類することができる。

20 答法の記述データと、高齢者との頻度（毎日・週に1回~2回・月に1回~2回、年に1回~2回・ない）の5件法の対応分析を行った（図2）。

その結果、「週に1~2」の周囲には「耳」「遠い」「体」「悪い」「早起き」「物知り」「優しい」などの語が見られた。「強い」は「年に1~2」と「毎日」の回答項目において特に多く出現した特徴的な語で、「自我が強い」「意思が強い」という肯定的にも否定的にもとれる文脈で使用された。「ない」の周囲には「事故」や「話す」が見られた。交流頻度の各項目を見ると、「ない」とそれ以外で左右のグループに分かれているため、回数に関わらず高齢者との関わりがあるかないかで高齢者

イメージの傾向が異なることが示唆された。

次に20 答法の記述データと、同居経験の有無（あり・なし）の2件法との対応分析を行った（図3）。

その結果、「ある」の周囲には「年金」「強い」「増える」「知識」「早起き」「病気」の語が見られた。「ない」の周囲には多くの語が見られたが、特に多く出現した特徴的な語として「物知り」「事故」「必要」「言う」「怖い」が見られた。抽出語で多く出現した「優しい」は原点付近にあり、同居経験の有無に関わらず出現した語であった。

次に20 答法の記述データと、同居状況（現在・過去）の2件法との対応分析を行った（図4）。

その結果、「現在」の周囲には「強い」が見られ、「自我が強い」という文脈で使用されていた。また、特に多く出現した特徴的な語として「経験」「車」が見られた。「過去」の周囲には多くの語が見られ、特に多く出現した特徴的な語として「好き」「介護」「大変」「一部」「歩く」などの身体的特徴や社会的特徴に関する語が見られた。「現在」と「過去」では「過去」の方が高齢者の大変さが示される結果となった。

次に20 答法の記述データと、同居期間（10年以上・5年以上10年未満・1年以上5年未満・6ヶ月以上1年未満・6ヶ月未満）の5件法との対応分析を行った（図5）。

その結果、「1年以上5年未満」で特に多く出現した特徴的な語として「一部」「歩く」がみられた。「6ヶ月以上1年未満」の周囲では「強い」「大変」「介護」がみられた。「5年以上10年未満」と「10年以上」は近い位置にあり、それぞれ

大学生の高齢者に対するイメージの研究

れの周囲に多くの語が見られたが、原点に近い位置にあるため出現は特徴的であるとはいえなかった。全体では5年以上のグループと1年未満のグループができ、それぞれのグループ同士で近い高齢者イメージをもつことが示唆された。「1年以上5年未満」は独立した配置で、「一部の人は～」といった、高齢者全体を指さない表現を用いて記述する傾向が見られた。

次に20答法の記述データと、高齢者への興味(ある・どちらかといえばある・どちらでもない・どちらかといえばない・ない)の5件法との対応分析を行った(図6)。

その結果、「ある」の周囲には「早起き」「病気」が見られ、特に多く出現した特徴的な語として

「話す」「豊富」がみられた。「ない」の周囲には「介護」「自分」がみられ、特に多く出現した特徴的な語として「言う」が見られた。「言う」は高齢者が「～を言う」「～とよく言う」という文脈で使用されていた、「どちらかといえばある」、「どちらかといえばない」は近い位置にあり、どちらも多くの語が周囲に見られた。「どちらでもない」の周囲には多くの語が見られ、特に多く出現した特徴的な語として「体」「話」「必要」が見られた。全体を見ると「ない」、「どちらでもない」が独立し、「どちらかといえばある」、「どちらかといえばない」がグループになっていた。「ある」もややこのグループに近い。

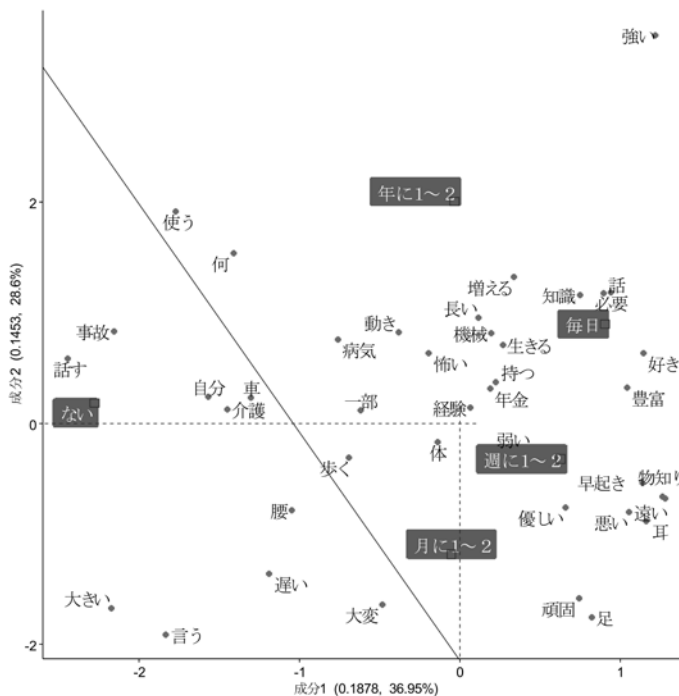


図2 高齢者との交流頻度と20答法の記述データの対応分析

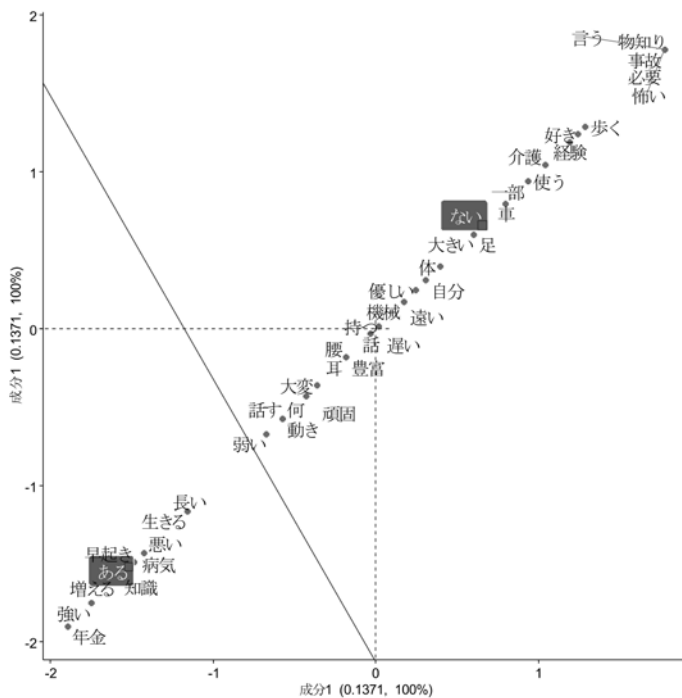


図3 居経験の有無と20答法の記述データの対応分析

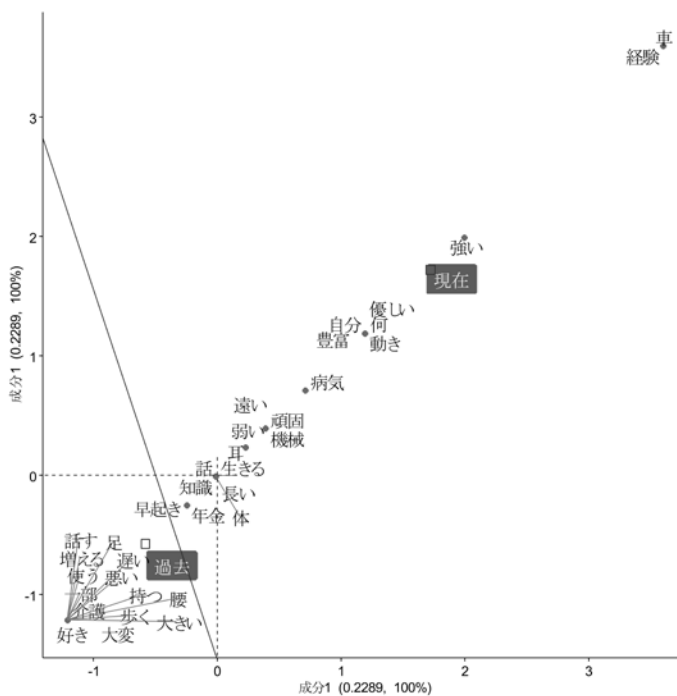


図4 同居の状況と20答法の記述データの対応分析

考 察

本研究では、大学生が持つ高齢者に対するイメージについて20 答法を用いて明らかにすることを目的とし、また、高齢者との関わり頻度や同居の有無、期間、興味関心の有無を外部変数としてイメージへの影響を示そうとした。

1. 高齢者イメージ測定のための20 答法

回答数の最も多かった語は「優しい」と「弱い」であり、性格特徴を表す語である「優しい」はその他の性格特徴を表す語に比べ出現頻度が高く、「高齢者は優しい、身体や機械操作といった側面では弱い」というイメージをもつ大学生が多いことが示された。身体的特徴との繋がりから、高齢者には年金や介護といった社会的支援が必要であると考えていることも示された。「持つ」については病気をもつ、知識をもつ、お金をもつ、鉛をもつといった様々な文脈で使用され、もっているものの豊かさや抱えているものの重さ、物理的に手に持つものといった様々な「持つ」イメージの表現がみられた。特に知識や経験が豊富というイメージは老賢者に近いと考えられ、高齢者に対して肯定的なイメージがあることを意味する。しかし、「言う」は「～を言う」「～とよく言う」という文脈で使用されていたことから、高齢者の発言を面倒に感じる否定的な側面もみられた。

「車」「事故」からは高齢運転者の危険な運転について、やはり強いイメージがあることが考えられる。5 回以上の出現はなかったが、「免許の返納をすべき」「逆走」などの車に関する記述は複数見られ、高齢運転者の事故について危機意識や問題意識のある大学生は多いことが示された。しかし、これらは身体的特徴などの他の語とは結びつきが弱かったため、運転に必要な能力の低下よりも「事故」により強いイメージがあるといえる。このことから、メディアの高齢運転者の事故に関するショッキングな情報が、高齢者イメージに影響している可能性が考えられる。

「何」「怖い」については「何をするかわからない怖さ」が表現されており、高齢者に対する得体の知れなさや予想外の行動をとるかもしれないという不安感があることがわかった。予想外の行動

については車の事故が考えられるが、家庭内やアルバイトで理不尽な怒りをぶつけられた経験なども予想外の高齢者の行動に含まれていると考えられる。

近年「老害」という言葉が目立つようになったが、本調査での出現は3 回で分析基準の出現5 回以上には満たない数であった。

2. 高齢者との関わりについての質問

交流頻度について、回数に関わらず「ある」と「ない」で左右に分かれ、交流頻度がない人に出現しやすい語があることが示された。「ない」の周辺に「事故」があることから、メディアが高齢者イメージに関する情報源になっていることが考えられ、河合(1994b)の述べていた高齢者の混乱状態がイメージに残りやすい可能性がある。老いは自然なことであるが、「誰もがグラデーション状に老いを深めていく」という意識が無いと、目の前にいる混乱状態の高齢者のみが印象に残りやすいと考えられる。

同居の有無について、同居経験のない人の方が原点から離れた語が多く、特徴的なイメージをもっていたため、同居がより具体的で事実に基づいた平均的な高齢者イメージに繋がっていると考えられる。同居の状況について、現在同居している人は「車」についての記述が特に多く出現し、自動車事故や免許返納がより身近な問題であると考えられる。「経験」についても特に多く出現しており、高齢者との生活の中で経験の豊かさを感じる場面が多く、老賢者の側面に遭遇しやすい可能性がある。一方、過去に同居していた人は「足」「腰」が「悪い」、「介護」、「大変」といった記述が多かった。過去に同居していた人の中には、死別によって同居が解消された人も含まれる可能性がある。老いや死の直前の状態を見聞きしたり、Kübler-Rossの述べた「年を取ることや死ぬことの意味」を受け取ったりする中で、イメージに強く影響する体験をしていることと考えられる。比較すると、現在同居している人の高齢者イメージは車を運転し、経験豊富な元気なものといえる。

同居の期間について、同居が1 年未満のグループは「介護」や「大変」のイメージがあり、家庭の状況で短期的に高齢者と同居した場合が考え

られる。10年以上同居している人は原点に近く、特徴的でない語が出現していたため、高齢者と過ごすほど一般的で正確なイメージをもちやすいと考えられる。

高齢者への関心について、ある人は「話す」、ない人は「言う」が特に多く出現していた。「話す」は「よく話す」「話すのが好き」、「言う」は「～を言ってくる」「～とよく言う」という文脈で使用され、関心がない人の方が高齢者側からの一方的なアクションがある場面をイメージしていると考えられる。

3. 今後の課題

本研究では20 答法を用いて高齢者イメージを分析した。20 答法を用いたことで、調査協力者は自らの言葉遣いで高齢者イメージを記述することができたが、回答した順番も含めて分析を行うと、より直感的な高齢者イメージを検討することができると思われる。20 答法の回答数には個人差があることや、最大20の回答順を外部変数にすることから、さらに多くの記述データが必要になるだろう。

また、本研究の調査協力者は大学生であることから、小嶋ら(2022)の報告と同様に祖父母を想像した人が多かったと考えられる。しかし、具体的に誰を想像しながら回答したのかについては調査を行わなかったため、正確には明らかにはならなかった。中年期、老年期になるにつれて身近な高齢者は、親や兄弟、自分自身などに変化していくが、その際の高齢者イメージの変化について明らかにし、青年期にあたる大学生との比較、検討を行うことを今後の課題とする。

引用・参考文献

樋口耕一(2020). 社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して——第2版ナカニシヤ出版。
 樋口耕一・中村康則・周景龍(2022). 動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング ナカニシヤ出版。
 平野敏政(2009). 家族・都市・村落生活の近現代 慶応義塾大学出版会。

石津仁奈子・石川りみ子・江口恭子(2021). 老年看護学概論受講後の看護大学生の持つ高齢者イメージ 秀明大学看護学部紀要, 3(1), 51-59.
 岩熊史朗・横田仁(1991). セルフ・イメージの発達の变化——WAI技法に対する反応パターンの分析——社会心理学研究, 6(3), 155-164.
 Jung, C.G. (1971). *Die Archetypen und das kollektive Unbewusste. Gesammelte Werke 9/I*. Rascher Verl. 林義道(監訳)(1999). 元型論. 伊国屋書店。
 桂晶子・佐藤このみ(2008). 看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ 宮城大学看護学部紀要, 11(1), 49-56.
 河合隼雄(1991). 河合隼雄全対話 人間, この不思議なるもの 第三文明社。
 河合隼雄(1994a). 河合隼雄著作集 ユング心理学入門1 岩波書店。
 河合隼雄(1994b). 河合隼雄著作集 生きることと死ぬこと13 岩波書店。
 警察庁交通局(2023). 令和4年における交通事故の発生状況について. <https://www.npa.go.jp/bureau/traffic/bunseki/nenkan/050302R04nenkan.pdf> (2023/12/24 取得)
 小嶋洋一・孫子涵・中畚大貴・劉華霏・弘津公子・徳田和央・長谷川真司・吉村耕(2022). 大学生の持つ高齢者イメージとその影響要因 山口県立大学学術情報, 15, 53-63.
 厚生労働省(2023). 令和4年版 簡易生命表の概況 1 主な年齢の平均余命 厚生労働省. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life22/dl/life22-02.pdf> (2023/12/24 取得)
 Kuhn, M. H., & Mcpartland, T. S. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
 宮崎駿(1984). 風の谷のナウシカ スタジオジブリ. 東映。
 森本栄一・橋本貴充(2021). 大学生の高齢者イメージに影響を与える要因の分析——心理学的指標を基にして——グローバルビジネスジャーナル, 7(3), 13-20.
 内閣府(2023a). 令和4年度 高齢化御状況及

び高齢者社会対策の実施状況 1 高齢化の現状と将来像 内閣府. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf (2023/12/21 取得)

内閣府 (2023b). 令和4年度 高齢化御状況及び高齢者社会対策の実施状況 3 家族と世帯内 閣 府. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/pdf/1s1s_03.pdf (2023/12/21 取得)

大谷英子・松木光子 (1995). 老人イメージと形成要因に関する調査研究— (1) 大学生の老人イメージと経験の関連. 日本看護研究学会雑誌, 18 (4), 25-38.

高橋茂人 (1979). アルプスの少女ハイジ 瑞鷹エンタープライズ, 東宝.

山田ゆかり (1989). 青年期における自己概念の形成過程に関する研究—20 答法での自己記述を手がかりとして—心理学研究, 60, 245-252.

大学生の高齢者に対するイメージの研究

“高齢者”ということで、あなたの頭に思い浮かんで来たことを、“高齢者は...”に続けるようにして、20項目以内で書いてください。どういうことを書いたら良いとか、いけないとかということはありませんので、思いつくままに自由に書いてください。

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

高齢者は_____

あなたと高齢者についてお尋ねします。以下の質問を読み、最も適切と思われる答えを○で囲んでください。

質問 1. 高齢者と関わる頻度

毎日	・	週に1または	・	月に1または	・	年に1または	・	ない
ほぼ毎日		2回程度		2回程度		2回程度		ほとんどない

質問 2. 高齢者との同居経験

ある	・	ない
----	---	----

質問 3. 高齢者との同居状況（質問 2 で「ある」と答えた人のみ回答）

現在	・	過去に
同居している		同居していた

質問 4. 高齢者との同居期間（質問 2 で「ある」と答えた人のみ回答）

10年以上	・	5年以上	・	1年以上	・	6ヶ月以上	・	6ヶ月未満
		10年未満		5年未満		1年未満		

質問 5. 高齢者に対する関心

ある	・	どちらかと	・	どちらでも	・	どちらかと	・	ない
		いけばある		ない		いけばない		

回答は以上です。ご協力ありがとうございました。

大学生の高齢者に対するイメージの研究

高齢者イメージに関する調査

本日は調査にご協力いただき、ありがとうございます。

この調査は、大学生がもつ高齢者イメージについて調べることを目的としています。下記の注意事項を読んで、質問事項にお答えください。よろしくお願いいたします。

調査倫理に係わる注意事項

- ・正しい答えや、間違った答えというものはありません。あなたの思った通りに回答してください。また、回答途中でやめたい場合は、いつでもやめることができます。
- ・この調査は2つのパートで構成されています。また、表紙を合わせて3枚になっていますので、乱丁・落丁等がありましたら申し出てください。
- ・回答はすべて厳重な管理のもとで、直ちに記号化され、コンピュータにより統計的に分析されます。ご協力いただいた方にご迷惑をおかけすることは決してありませんので、日ごろお感じになっていることを率直にお答えください。
- ・この調査はデータを入力後、シュレッダーにて処分するなど、個人情報の保護に最大の配慮をいたします。

本調査にご協力していただける方は、以下の記入欄に記入してください。
記入をもって、回答に同意いただいたものとさせていただきます。

記入欄

氏名 ()
年齢 ()
性別 ()

※この調査についてご質問などございましたら、以下の連絡先までお尋ねください。
研究実施者：京都先端科学大学人文学部心理学科 大坪真子 (2020p079@kuas.ac.jp)

調査にご協力いただいたみなさまへ

京都先端科学大学
人文学部心理学科 山ゼミ
大坪真子

本日は調査にご協力いただき、本当にありがとうございました。今回の調査は、「高齢者に対するイメージ」や、「高齢者に対するイメージ」と「高齢者との関わり」の関連について検討するために行ったものです。また、みなさまに最初に回答していただいたものは正しさや間違いを問うものではなく、文章や言葉の内容を分析し、言葉の出現頻度やつながりを明らかにするために行ったものです。

今回の調査の分析結果についてお問合せ、ご質問がありましたら、2020p079@kuas.ac.jpまでご連絡ください。ただし、個人情報の保護に万全を期するため、全てのデータを入力した後に質問紙はシュレッダーにかけ、入力したデータにつきましても個人情報を消去して分析をしますので、集計後の個人的なデータについてはお答えできません。また、分析結果につきましても、データの入力および分析に多少の時間が必要であるため、お答えできるのは今学期終了後となることをご理解ください。

今回は本当にありがとうございました。ご協力に感謝いたします。